東日本大震災
被災地支援活動の記録

忘れない・・・

宝塚市

平成２３年（２０１１年）３月１１日（金）午後２時４６分、宮城県牡鹿半島の東南東約１３０km付近で、深さ２４kmを震源とするマグニチュード９．０の大地震が発生した。

気象庁はこの地震を「平成２３年（２０１１年）東北地方太平洋沖地震」と命名し、また４月１日、政府はこの地震による災害を「東日本大震災」と発表した。

この地震により、建物の倒壊や地盤の崩壊、液状化などの被害に加え、岩手県、宮城県、福島県の太平洋沿岸には大津波が襲来し、津波による浸水範囲は東日本６県６２市町村で５６１km²の面積に及んだ。多くの人たちが津波の犠牲になり、平成２４年（２０１２年）１０月末時点で死者１５，８７２人、行方不明者は２，７６９人にのぼった。

この冊子は、発災直後からの宝塚市民を中心とした被災地支援の記録をまとめたものである。

■ CONTENTS

緊急消防援助隊（消防本部） 1.
給水応援（上下水道局） 3.
医療支援（市立病院） 5.
子どもの心のケア（教育委員会） 7.
炊き出し支援 9.
宝塚市議会が被災地に見舞金を寄贈 11.
自治会連合会による福島県須賀川市へのお見舞い 12.
宝塚希望応援隊 13.
宝塚市から被災地へお見舞いと激励の訪問 33.
職員派遣による被災地復興支援 36.
岩手県大船渡市の中学生を宝塚市に招待 37.
様々な支援活動 40.
宝塚市へ避難・転入された方への支援 43.
被災地はいま 45.

発刊にあたって

宝塚市長　中川智子

昨日までの「普通の生活」が突然破壊されてしまう災害。私たちは18年前にその苦しみを身をもって体験したまちです。あの辛かった日々に何より心強く思い、嬉しかったのは全国から駆けつけてくれた多くの人々の支援でした。「被災者を助けよう」と物資、義援金、ボランティア、自治体の応援、ただただ感謝でした。人々の優しさは希望でした。

２０１１年3月１１日に起きた東日本大震災からもうすぐ２年になります。地震被害、すべてを流されてしまった津波被害、そして原発事故による避難生活、放射能の不安。弔うことすら出来ない行方不明者を抱える家族の悲しみは察するに余りあります。

この記録集を編んだ目的は、「これからも被災者に寄り添い、出来る支援を続けていこう」という思いからです。小さなことしか出来ないかもしれません。でも「私たちはあなたたちのことを決して忘れませんから、希望を持って共に生きていきましょう」というメッセージを送り続けようと…。宝塚からの思いはきっと日々懸命に生きていらっしゃる方々に届くことでしょう。

「明日」が文字どおり明るい日になることを祈ります。

平成２４年（２０１２年）１２月

一刻を争う救助活動

緊急消防援助隊（消防本部）　平成23年（2011年）3月11日～4月17日

兵庫県全市町の消防で構成される兵庫県緊急消防援助隊は、発災当日の3月11日から4月24日にかけて、第1次から第11次までの派遣を行い、504隊1924名が被災地で活動を行いました。
宝塚市からは、3月11日から4月17日までの間、第1次から第9次まで連続で派遣を行い、車両5台、延べ71名の消防職員が宮城県山元町と南三陸町を中心に救助活動を行いました。

凄まじい被害の姿を目の当たりにして、「自分たちには何もできないのかもしれない。けれど、一緒に来た仲間を信じて、自分たちのできる精一杯の活動をしよう」と誓った。

１冊の泥まみれのアルバム…。そこには、多くの人々の生きた証しが残されていました。
行方不明の家族の安否を尋ねる人々は、前を向いて歩みだすことができないままでいました。
私たちの活動が少しでも人々の心を照らせれば…。
みんなそんな思いで必死に活動しました。

瓦礫の中の救助活動

活動内容は人命救助で、２次派遣隊は南三陸町の志津川地区、保呂毛地区、波伝谷地区と活動場所を移動し、津波に流された車両の内部の捜索や、倒壊した家屋の瓦礫を人力で取り除きながらの捜索を重点的に実施しました。

現地の被害状況は予想以上で、いたるところで津波の爪痕が残されており、今回の災害は地震そのものより津波災害だったことが確認でき、被害の大きさに言葉を失いました。テレビなどでの報道により現地の被災状況は確認していましたが、実際に被災地入りすると建物が津波や火災で崩壊し、町一面が瓦礫と化し想像を絶する光景であり自然の脅威を痛感しました。

現地では天候が悪く積雪などもあり、悪条件が重なる中での活動となり、歯がゆい思いをしました。このような状況の中でも生存者がいることを信じ、全力で捜索を行いました。ところどころにアルバムや記念写真が散乱しているのを見るたびに、この人たちは無事でいてくれるのかという思いとともに、元気でおられることを信じ活動を続けました。

活動中や休憩中、倒壊した自宅を確認する被災者の方や、リュックサックを背負い移動する被災者の方々から、心身ともに疲労しているにもかかわらず、私たちに「お疲れさま」「またよろしくお願いします」などの激励の言葉や感謝の言葉をかけていただいたときには胸が熱くなりました。短い期間での活動でしたが、被災地の様々な光景を目の当たりにし、今も終わりの見えない避難所生活を強いられている被災者の方々の苦労を思うと、胸の締め付けられる思いです。

今回の派遣で被災地を直接目にし、活動をしたことで、今後被災地のために何ができるのかを考え、何か少しでも役に立ちたいと改めて感じました。

（第２次派遣隊　消防本部 T.I）

命をつなぐ水を届けます

給水応援（上下水道局）　平成23年（2011年）3月14日～5月19日

3月14日から5月19日までの間、第1次から第5次までの派遣を行いました。
1組4名、延べ20名（4トン給水車1台、ワンボックスカー1台）で、宮城県石巻市、岩手県大槌町、陸前高田市等で給水活動を支援しました。

水が無ければ生活の全てが成り立ちません。
トイレはおろか、煮炊きや洗濯、清潔を保つにも必要な水。
そんな命の水を途絶やさないために全力で取り組みました。

日々、疲れも蓄積していく中、「ありがとう！」「ご苦労様」とかけられた一言が、明日への活力に！

飲料水はペットボトルしかなく

給水活動は、２２日から２５日の４日間。拠点である盛岡市新庄浄水場で早朝６時に４ｔ給水車を満水、７時に出発。片道約１５０ｋｍの道のりを高速道、一般道を走行し約３時間かけ大津波で被害のあった大槌町の被災地に入る。水道事業所で指示を受け、高台にある避難場所の大槌高校に向かう。

大槌高校には約１０００人の町民が避難しており、自衛隊の給水タンクと当市４ｔ給水車で受水槽に加圧給水を行った。水道事業所での補水後、大槌町の災害対策本部が設置してある中央公民館に向かう。この公民館には対策本部職員、自衛隊職員、報道関係者、ボランティアそして避難者約１０００人の町民であふれている。電気は東北電力の移動電源車により供給されている。飲料水はペットボトル。手洗い、食器洗い用の水は自衛隊が使っている５００Ｌの仮設タンクのみである。もちろん、トイレ用水等は断水中であるため使用後も流せない状態であった。私たちは、５０ｍのホースを繋ぎ４ｔの水を高架水槽に加圧給水をし、再び補水に向かった。補水往復時間約４０分で高架水槽をみると空の状態である。一気にトイレ用水等で使用された模様。再度、高架水槽に加圧給水を行っていると加古川市の応援給水車が到着、その給水車から補水を行いながらどうにか高架水槽を満水にする。16時３０分、本日の給水活動を終了し、新庄浄水場に帰る。時間はすでに２０時、長距離を走行したが充実した1日であった。

今回の東日本大震災と阪神･淡路大震災との違いは、地震での被害は少なく大津波での被害が相当なものであったことだ。大槌町では重油タンクが大津波により、破壊され、油が漏れ、油の海に引火、火の海となり大火災によって大槌町の半分以上が燃えてしまったと聞いて驚いた。

（第２次派遣隊　上下水道局 K.I）

からだと心のケアを

医療支援（宝塚市立病院）　平成23年（2011年）3月19日～5月29日

3月19日から5月29日までの間、第1次から第3次まで、宝塚市立病院の医師、歯科医師、看護師、薬剤師、歯科衛生士、臨床工学技士延べ15名を宮城県南三陸町、石巻市へ派遣、避難所等で診察・治療、衛生指導、救護活動を行いました。

集団生活を余儀なくさせられる避難所では、感染症の集団発生やストレスから来る体調不良など、身体的にも精神的にもいち早いケアが求められていました。

私たちの医療活動が、被災した方々の心のケアにもつながることを祈って。

精神的に不安定な避難所生活

被災者は２ヶ月間、体育館で段ボールで区切られているだけという生活空間で暮らしているため、プライバシーはもちろんなく、食事も好きな物は食べること出来ず、お風呂も毎日入ることができない状態でした。そのために、精神的に不安定になる被災者が多くなり、『心のケアチーム』が避難場所を回診するようになってきていました。（略）

今回の派遣を通して、想像していた以上に被災者のストレスは大きいものだと実感しました。そのようなストレスは、早期に軽減できるように診療や援助をしなければ、その人だけではなく、周囲の人々へも影響してしまうのではないかと思いました。町は復興していきますが、被災者の気持ちは反対に精神的に不安定になってしまい、それにより自殺する方も増え、災害派遣看護師は、医療だけではなくその方の生活を守り、自立していくように支援しなければならないと感じました。

（第３次派遣隊　市立病院 T.N）

避難所の仮設トイレは周囲をビニールシートで簡易的に覆われた建物で、鍵などはなく男女兼用で、用を足している最中にドアが開くこともありました。便座も汚れている状態でした。トイレ内は大変狭く、介助の必要な高齢者には対応が難しいと思われました。（略）

避難所の食事を見せて頂く機会がありましたが、炭水化物が多く、おにぎりとつけものという食事が多いようでした。物資の問題もありますが、災害時の栄養バランスについての対策が必要であると感じました。（ 略 ）

平常時からのコミュニケーション、ネットワークが重要であり、災害関連死を少しでも減らすために、災害時の医療システムの構築が重要であると感じました。

宝塚市でも大規模災害を想定した災害時の医療システムの構築を考えていかなければならないと思います。

（第３次派遣隊　市立病院 A.K）

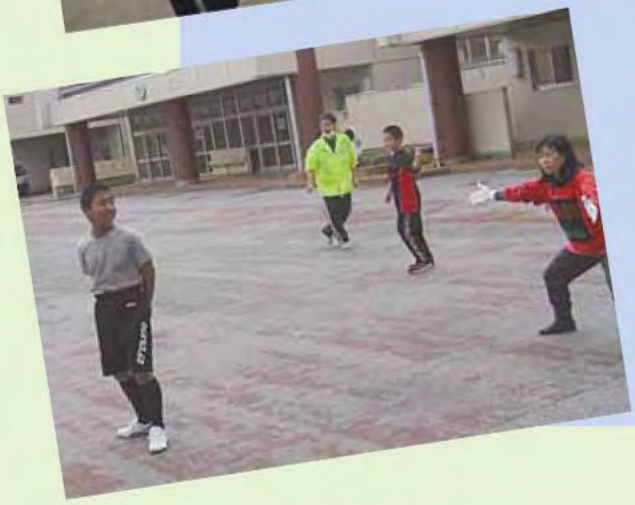
傷ついた心に癒しを

子どもの心のケア（教育委員会）　平成23年（2011年）4月28日～5月10日）

4月28日（木）から5月10日（火）までの間、教育委員会教育支援室職員8名が、岩手県大船渡市の大船渡北小学校体育館、大船渡中学校体育館の避難所で子どもの心のケアや、保護者の相談活動を行いました。

大人も子どもも人とのかかわりを求めていました。目の前で全てを奪われてしまった子どもたち。津波の恐怖を懸命に語ってくれる子ども、黙って母親のそばを離れない子ども。みんな大きな苦しみと戦っていました。

こんなに仲良しになれました！



人との関わりを通して

- 笑顔や明るい表情を見せながらも、母親のそばを離れようとはしない子どもやそのお母さんの不安な気持ち、津波から逃げたときの様子を詳しく語る子どもの願い、津波の再現遊びをする子どもの姿に周囲の大人が見せる戸惑い等、様々な思いを聞かせていただくことができた。
- 5 月 11 日の岩手日報新聞の記事に、うれしいコメントが掲載されていた。「大船渡市の仮設住宅で生活する女子児童は、『兵庫県宝塚市のボランティアの人と仲良くなった。私も積極的にボランティアをやりたいと思うようになった。』という率直な思いを語ったということです。」この様な力強い言葉や、私たちの活動に対しての温かい言葉で私たちこそが元気をいただいた。
- 遠くから来た私たちに、ねぎらいの言葉をかけてくださった方々の笑顔が今も心に残っている。人とのふれあいのすばらしさを今後も大切にし、多くの人々に伝えていきたい。
- 元気そうに過ごしている大人や子どもたちも、様々な心身反応を抱えている。この経験をしっかりとそれぞれの専門性として確立し、今後も引き続き教育相談活動また支援活動に生かしていきたいと思っている。

（参加した各職員の感想）

温かい食事で元気を

炊き出し支援　平成23年（2011年）3月25日～5月16日

3月25日（金）から5月16日（月）までの間、第1次から第3次まで、市民ボランティアと共に職員延べ21名が大船渡市、大槌町で炊き出し支援活動を行いました。

震災から2週間、「やっと温かい食事が出来た」と涙を流しながら食べてくださいました。

「温かいものが食べられて、
まるで正月みたい！」と …。
みんなの心も温まりました。

焼き鳥は
大好評でした！

たった一杯の豚汁でしたが

1回目は大船渡市の末崎中学校というところでした。失敗は許されない、食中毒を起こしてはならないという緊張と、やはり、「この支援は望まれているのだろうか」という不安感一杯で作業を進めていきました。

無事に作り終えたところに現地の記者が、「おばあさんが豚汁を泣いて食べてくれていましたよ」と教えてくれました。一気に戸惑いが吹き飛んで、涙が出ました。献立はそこで知ったのですが、私たちの豚汁が1杯だけでした。

2回目は夜です。漁村厚生施設というところでした。ここでの炊き出しは、避難所にいる人だけではなく、近隣住民の方へも提供しました。雪の降っている夜に、みなさんがお鍋を持って並んでくれるんです。「3人前をお願いします」「5人分をお願いします」。中には、カップめんの入れ物に「これに入れてください」と言われる方もいました。この避難所まで1時間歩いて豚汁を取りに来た小学生もいました。

この夜の献立は、きっちりと計って配られるご飯と私たちの豚汁だけです。もう「豚汁1杯が支援になるのか」という戸惑いは完全になくなっていました。『支援は理屈じゃないんだな』と思いました。ここではみなさんが見送ってくれました。被災地のみなさんから逆に、「がんばってください」と手を振ってもらいました。これには車の中で、一緒に行った調理員さんと声を出して泣きました。

3回目はリアスホールというところで昼ごはんの提供です。こちらは比較的立派な建物です。被災地というのを忘れてしまいそうな建物でした。しかし、次の日の地元紙にはリアスホールで食べた方のコメントが載っていましたが、それは「震災後に温かいものを初めて食べました」という内容でした。これにも涙が出ました。

（教育委員会 S.O）

宝塚市議会が被災地に見舞金を寄贈

宝塚市議会が福島県須賀川市に３０万円、宮城県石巻市、岩沼市にそれぞれ５０万円の義援金をお送りしました。また、岩手県の被災地を訪問し、遠野市、大船渡市、大槌町に、それぞれ３０万円の見舞金をお届けしました。

平成24年（2012年）4月30日（月）から5月2日（水）にかけて、岩手県下の被災地を16名の議員団が訪問し、見舞金をお届けしました。

なお、清荒神清澄寺から遠野市、大船渡市、大槌町の3自治体への見舞金寄贈（各100万円）、宝塚市役所すみれ会（市役所管理職員の親睦会）から遠野市へ10万円、宝塚市立長尾小学校育友会から大船渡市の小学生へノート、鉛筆などの文具類寄贈の申し出を受け、それぞれ目録をお届けしました。

江原和明議長（中央）北野聡子副議長（左）から
戸田公明大船渡市長に目録を贈呈

須賀川市長が来宝

文具類寄贈

南三陸町長が来宝

自治会連合会による福島県須賀川市へのお見舞い

平成23年（2011年）6月27日（月）から28日（火）までの間、宝塚市自治会連合会尾﨑久会長、稲野廣前会長が福島県須賀川市を訪問し、義援金1,000万円をお贈りしたほか、お見舞い植樹を行いました。

尾﨑会長（中央）と稲野前会長（左）が橋本克也須賀川市長（右）へ
見舞金1,000万円の目録を贈呈

須賀川市とは、明和3年（1766年）に薬種商が宝塚市から牡丹の苗を持ち帰り栽培したことから始まる牡丹を通じたご縁があります。

大阪・福島間の航空路が開設された平成5年（1993年）10月に、須賀川市から牡丹が里帰りし、市園芸流通センターや市役所中庭に植えられました。また、阪神・淡路大震災の時には、当時の高木博市長（故人）が病を押して伊丹空港から徒歩で義援金2,000万円を届けてくださいました。

阪神・淡路大震災のご恩返し

阪神・淡路大震災の時の恩返しとして、6月27日から28日にかけて、宝塚市の自治会を代表して宝塚市自治会連合会尾﨑会長と稲野前会長が須賀川市を訪問し、橋本克也須賀川市長へ見舞金1千万円の目録を贈呈しました。橋本市長から、多額の見舞金に込められた宝塚市民の温かいお志しに対するお礼と感謝の言葉をいただきました。

須賀川市は、福島県の内陸部にあり津波の被害はなかったものの、震度6強を記録し、市庁舎も地震の影響により使用不可能となっているほか、家屋の倒壊や湖の決壊による家屋流失もあり、水道や道路など市民の生活を支える基盤が深刻な被害を受けています。

橋本市長に今一番困っていること、助けてもらいたいことをお聞きしたところ、「福島第一原子力発電所から離れているのですが、原発の風評被害が産業や経済に大きく影響を及ぼしています。全国の皆さんが東北の物産品を購入いただくことで復興へとつながります」と述べられました。

また、須賀川市町内会長会の役員の方と懇談し、今後の復興支援への取組みなどの意見交換を行い、交流を深めました。

須賀川と宝塚をつなぐ縁は牡丹です。今後の市民交流が深まることを誓い合って牡丹のお見舞植樹を行いました。

～宝塚市自治会連合会ホームページから引用～